

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 言語による直観への誘い(いざない)   |
| Author(s)    | 中村, 雅之  |
| Citation     | 年報人間科学. 1990, 11, p. 1-15   |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/7192">https://doi.org/10.18910/7192</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学人間科学部（一九九〇年三月）

『年報人間科学』第十一号 一頁―一五頁

言語による直観への誘い

中  
村  
雅  
之

# 言語による直観への誘いいざな

## 序

ベルクソンは言語に対してどのような態度をとったか。こう問えば、答えは自明であると思われるかもしれない。ベルクソンは言語を直接的なものの、あるいは実在の認識を妨げ、歪める障害であると考えていた、これが当然の答えであるように見える。しかし、果たしてそうだろうか。誰もが知る通り、ベルクソンは生涯を通じて言語に懐疑的な態度をとった。自分の哲学は、言葉によらない解決を目指したとき始まったと彼は言う。しかし、彼が言語に由来する誤謬を執拗に弾劾し続けたとすれば、そのこと自体が言語に向けられた絶えざる反省なしにはありえなかつたはずである。彼は言語に終始懐疑的であつたが、にもかかわらず語るのをやめはしなかつた。とすれば、彼は言語がもつある側面を実在の認識に対する妨げとして非難したが、その妨げから逃れるためにもやはり言語にかかわる働きを利用したのではないだろうか。实在認識の方法としてベルクソンがとなえたのは、言うまでもなく直観の方法である。また、直観そのものは表現しえない、としたことも周知のとおりである。しかし、表現しえない直観をわれわれに伝えるために、ベルクソンはさまざまの手立てを駆使している。そしてその手立ては他ならぬ言

語にかかわる働きの利用であると考えられる。本論の目標は、ベルクソンが言語がもつどのような側面を利用して、逆説的に言えば表現しえないものを表現へともたらそうとしたかを明らかにすることである。そのためにはまず、実在の認識を妨害するとベルクソンが考えた言語の側面、すなわちその実用性に目を向けなければならぬ。

## 一、言語の実用性

言語はわれわれの社会生活や行動を容易にする実用性に汚染されている。それゆえ、実在の認識を目指す哲学は、このような言語から免れる必要がある。ベルクソンの中心的な言語観を要約すれば、このようになるだろう。彼が、言語、概念、記号などは実在の認識を妨げると言うとき、批判はその実用的側面に向けられている<sup>(1)</sup>。言語は、われわれが事物を扱いやすいように、事物を切り分け分類する。それは、われわれにとって同じ効用をもつものは同じ項に、異なつた効用をもつものは異なつた項に分類する。分類の原理がこのような事物の側ではなくわれわれの側に置かれているという点だ

けではなく、分類の形態にも問題がある。言語は、これもまた社会生活への便宜から、つねに明確できっぱりとした分類を好む。(例えば、「魂」は「肉体」の否定として規定される。)言語がもたらす区別はつねに明確すぎる、という認識はベルクソンに一貫している。最後に言語、特に会話の言語は既成概念を保存する傾向にある。会話を、したがって社会生活を円滑にするためには、意志疎通の土台を共有する必要があるからだ。既成概念や既成の分類がその役目を果たす。会話 (conversation) は保守 (conservation) を目指す。

このように、言語を通して見られた事物の姿は「実在の分節 (PM, 33)」に従っていない。また社会生活の言語には、新しい概念に対する抵抗がつねに存在する。しかし、これらの点は言語がもつ不可避な特性ではないと考えられる。「私が反発を感じる者は、言語人 (ホモ・ロカクス) だけである (PM, 32)」とベルクソンが言うとき、彼は言語の実用的側面だけを標的にしている。実用を旨指さない言語の使用がもし可能であるとすれば、そのとき言語はもはや実在の認識を妨げないだろう。実用を廃した言語の使用、その例としてまず第一に挙げるべきは芸術における言語の使用である。「われわれ自身が芸術家と同じ努力をしてみよう誘うために、芸術家は、自分たちが見たもののいくぶんかをわれわれに見せようと工夫を凝らすだろう。言葉をリズムが生まれるように配列し、全体を有機化し、独自の生命を吹き込むことによって、彼らは、言語がもともと表現するためには作られていなかったものまで語る、とい

うよりむしろ暗示するのである。」(R, 119-20.)

ベルクソンは、自らのとなえる直観的方法と芸術活動とが、ある点で相似することを認めていた<sup>20</sup>。それゆえ、言語に対する彼の評価も、会話やコミュニケーションの場面と、言語を使って芸術的創造をおこなう場面とはまったく異なっている。芸術の場面では言語はその実用的目的から離れ、生命を取り戻すとされる。上の引用で言われている「暗示」とはどのような働きを指すのか、われわれは後にこの点を検討するだろう。ここで確認しておきたいのは、ベルクソンが言語を实在把握のための道具として全面的に不適合であると考えていたのではない、という点である。「私はまた、直観のこのきわめてささやかな部分が拡張され、詩を、次いで散文を生み、最初は記号でしかなかった言葉を芸術の道具に転換したことも認めよう」(PM, 87)。直観がある点で芸術活動と相似しており、一方言語のうちに芸術の道具となりうる生命が残されているなら、言語を直観の道具として使用する道があるはずである。以下、その可能性を探ることにしたい。

## 二、実在の分節

前節で見たように、言語はわれわれの実用的便宜に応じて実在を切り分ける。これに対して、実在の分節に即した表現を獲得するにはどうしたらよいのだろうか。そのための方策は言語から離れることではない。たとえ離れるとしても、われわれが後にするのは実

用的な言語のみである。他ならぬ言語を用いて実在の分節を表現する試みをベルクソンはいくつか示している。以下にその試みを大きく三つに分けて取り上げることにした。

a. 問題の新たな形での設定による意味の撓め

「もしこれらの観念を表現するために既存の言葉が見つかるならば、各観念にとって思いがけない幸運である。実際にはしばしばそうした好機を助け、言葉が思考に基いて型取られるように言葉の意味を撓める (Forcer) 必要があった」 (MR, 43)。

新しい観念は、それを表現するために新しい言葉遣いが必要とする場合がある。しかし、この引用で注意しなければならないのは、「言葉の意味」を強いて曲げる必要があると述べられている点である。ベルクソンは新しい観念を表現するために、新しい用語の導入を勧めているのでは決してない。むしろその反対であって、哲学はできるだけ日常語で済ませるべきである。たとえば彼は主張するのである。「万人の言葉で表現できないような (… ) 哲学的観念はない」 (M, 999-1000)。過去の偉大な哲学者たちも、新しい表現法を必要としたときには、特別な新しい語彙を作り出したりなどせず、できるかぎり日常語のやりくりによって新しい観念を表現しようとした (M, 1184)。

このような方針は、先に見た日常言語の実用性を警戒する態度と矛盾するのではないだろうか。日常語は実用性に汚染されていた。実在の分節を表現するという哲学の目的からすれば、日常語をでき

るだけ排除し、清潔な語彙を新たに作り出してそれを表現の道具にする方が得策ではないだろうか。

そうではない。第一に、一方で日常語の汚染を非難し、他方で日常語の使用を勧めるのは矛盾した態度ではない。哲学において勧められる日常語は、意味を撓められた日常語だからである。日常言語からその語彙を借りてきて、ただしその意味を新しく転換することが求められている。すなわち、過去の哲学者がそうしたように、「日常語を巧みに配列し、それによってこれらの語の意味に新しいニュアンスを与え、より精巧でより深い観念を翻訳できるように (ibid.)」することが肝要なのである。第二に、これはベルクソン自身は明言していないが、新造語の導入という手段は、新たな観念の表現という目的にとって必ずしも有効ではない。旧語彙を新語彙に置き換えるだけでは、しばらくの間読者の注意を引くことができるかもしれないが、旧来の分類や概念に新たな名称をつけただけで、分類や概念自体は手つかずのまま終わってしまう危険があるからである。それよりも旧来の語彙を保存し、その意味内容を変更する方が、読者の注意を持続的に引きつけ、ひいては既成の分類や概念を新たに編成し直すという目的を達成できると考えられる。古い語彙の新たな、独自の仕方による使用によって読者の中に抵抗が呼び起こされるからである。それは古い語彙が表現していた既成の分類ないし概念の惰性が示す抵抗である。読者はこの抵抗によって、新たな観念の導入が試みられていること、分類の再編成が企図されていること、概念の変革が要求されていることを知る。そして自分が

馴染んだ意味と、いま導入されようとしている新たな意味の間に生じるずれから、新たな観念の、つまるところ実在の分節の輪郭をおぼろげながら辿ることができるのである。第三に、日常語は表現の最終段階で採用されるのであって、哲学者はそれを出発点にするのではない。彼は直観の産物である新たな観念から出発し、最後に既成の観念にいたるが、その観念を変えてしまうのである。「そして彼「哲学者」が既成の観念に達するとき、このように彼の精神の運動に巻き込まれた観念は、語が文から意味を受け取るように新しい生命を吹き込まれるので、渦の外にあったときとはもはや別の観念になっているのである」(PM,134「」内は引用者。以下同)。

さてこのような「意味の撓め」は、具体的にはどのようになされるのだろうか。それは問題を新たに設定し直すことと連動しておこなわれる。問題を解決できるような形で設定できたとき、そこで使用される語彙は実在の分節に忠実であるとベルクソンは考える。逆に、実在の分節に忠実な概念を創造することができれば、問題は解決しうる形で設定することができる。問題の新たな設定と日常語の新たな意味の創造は、一方が他方の原因であるのではなく、同じ事柄の二つの側面であるといえる。既成の語彙が表現する実用のための分類をそのまま用いて、思弁的な問いを立てるとき、問題は解決不可能になる。問題の形式によって、限られたいくつかの解決しか許容されず、しかもそれらの間に優劣がないからである。彼はこのように既成の用語を鵜のみにし、それを用いて問いを立て、そこから自動的に出てくる解決の中から選ぶ者を哲学の「素人」と呼ぶ(M,

128)。「ほんとうに哲学するとは、問題の設定を創造し、その解決を創造することです」(Ibid.)。そして問題を新しく考えるとき、言葉は新しい意味を獲得する。このように、旧来の語彙の意味を撓めるには、それを用いて問題を新たな形で設定しなければならぬ。新しい問題という文脈の中で、語は新たな意味を獲得し、実在の分節により忠実になることができるのである。

問題の新たな設定をともなう新たな意味を獲得した日常語の典型的な例を、ベルクソンの著作から挙げる事ができる。それは「イマージュ」である。「イマージュ」は、事物と表象を同時に意味するという独自の仕方を用いられ、この語を使って「同じイマージュがなぜ科学と知覚という異なった体系に属することができるのか」という解決可能な問題を立てることができるのである。

#### b. 古典学習と翻訳

言語によって実在の分節を辿る第二の方策は、翻訳である。「良識と古典学習」(188)と題された講演の中で、ベルクソンは次のように述べている。「私はまさに古典教育のうちに何よりもまず、語の水を砕き、その下に思想の自由な流れを再発見する努力を見ます」(M,368)。ここで言われている古典教育とは、主として古代ギリシア語を現代語に翻訳することである。一般に、ある言語から他の言語への翻訳によって、ある観念は異なったいくつかの体系のうちではっきりした形を取るようになる。それによって、われわれは「決定的に静止した言葉 (fixed)」から解放され、「語から独

立に観念そのものを考えるように誘わ (i. p. d.) される。とりわけ古  
代語は、「われわれの言語とはきわめて異なった線に従って事物の  
連続を切り取っている (i. p. d.)」この点でいっそう効果があ  
る。引用から明らかのように、言語からの解放もやはり言語を使っ  
てなされる。

ここで特徴的なのは、異なる言語による、現実の異なった区分が  
相対主義の論拠ではなく、かえって実在の把握の手段とみなされて  
いる点である。ふつう異なる言語は現実を異なる仕方でも区分する  
という事実は、それゆえ異なる言語を使用する人々は異なる世界に住  
んでいる、という相対主義を招きがちである。ところが、ベルクソ  
ンの場合、他ならぬそうした複数の区分を利用し、そのどれもが特  
権的位置を占めることがないようにして、そこから実在の姿を浮き  
彫りにしようと企図されているのである<sup>(1)</sup>。このような異なった  
事実の線、あるいは異なったイマーシユを通じてそれらが収斂する  
点に実在を見出す、という思考法は彼の基本的な考え方の一つに  
なっている。さまざま「事実の線 (ES, 4)」は、そのひとつつひ  
とつは求められた認識を与えてはくれないが、それを見つづけるべき  
方向を示してくれる。それらの線が「収斂」する点に実在の姿が浮  
び上がるはずだというのである。(イマーシユの収斂については次  
節で扱う。) 実在の分節を辿る第三の手段は、言語によるこの「方  
向」の示唆である。次に節を改めてこの点を論じよう。

### 三、注意の「方向」転換としての直観

運動とそれが指し示す方向の隠喩は、ベルクソン哲学の基本的な  
性格を規定している。この隠喩は、彼の直観とその言語表現の問題  
をめぐる場面でしばしば登場し、要となる役割を果たす<sup>(2)</sup>。以下  
では直観の言語的表現というわれわれの課題にかかわる限りでこの  
隠喩がもつ意味を、朗読術、力動図式による再構成、イマーシユの  
収斂および身体経験に分けて検討することにした。直観の機能の  
一つは、われわれの注意を一定の「方向」に向け変えることである。  
以下で検討するのは、このような注意の向け変えのさまざまな手段  
なのである。

(1) 朗読術…ベルクソンの直観は言語表現の排除ではない。それ  
どころか言語(この場合発語だが)にかかわるある営みは直観に類  
比しているとさえみなされている。直観に類比的な言語的営み、そ  
れは朗読術である。

「いわゆる知性作用以前に、構造と運動の知覚がある。読まれるペー  
ジには、句読法とリズムがある。この二つをあるがままに記し、節  
のさまざまな文同士の、また文の要素同士の時間的関係を考慮し、  
情感と思考のクレッシェンドを切れ目なく追跡し、音楽的に記され  
たその頂点にまで至ること、朗読術とは何よりもまずこの点にある。  
(…) ちなみに、(今しがた定義したような読書法と) われわれが  
哲学者に勤める直観との間には、ある種の類比がある。直観は、そ  
れが選ぶ世界という偉大な書物のページのうちに構成の運動とリズ

ムを再発見しようとし、その中に共感によって自らを挿入して、創造的進化を生き直そうとするのである。」(P.M.94-5.)

直観は原理的には表現しえないものである。それをどうにかして伝えるためには、われわれに馴染みの経験に訴えるしかない。この場合、それはテキストを声に出して朗読するという身体的経験である。この経験そのものが直観の内容をなしているのではないが、朗読によってわれわれは著者の思考の「方向」を追うことができる。

いわば直観に向かう態勢をわれわれ自身のうちに造り出すことができるのである。「多くの人は、話すためには語を探さねばならず、

われわれは次いでこれらの語を思考の力によってひとまとめに継ぎ接ぎすると思っている。しかし実は語の上に、また文の上に、文よりもそれぞれどこか語よりもずっと単純なあるものがある。それは意味／方向 (sense) である。それは考えられたものというよりも思考の運動であり、運動というよりも方向である」(P.M.133)。思考の運動や方向をそのまま表現することはできない。しかし、思考を表現する文のリズムや抑揚がもたらす身体経験を通じて、われわれはそれに近づくことができる。思考の運動・方向は、発語の運動

・方向となって発現されるからである。われわれはリズムに乗って運ばれるとき、どの方向へ向かえばよいか、注意をどこへ向ければよいかを自然に悟る。リズムに乗った運動を模倣するとき、われわれは自分たちが模倣しようとしている運動の主であるかのように、その運動のすみずみまで予見できる。そしてこのような身体的共感、精神的共感を「微妙に暗示する」(D.I.9)。それゆえわれ

われは朗読がもたらすリズムによって、著者の思考と直接交流できる (P.M.94, n.)。本節の冒頭で触れたように、直観の機能の一つは、われわれの注意を一定方向に向けることである。朗読によるリズムの再構成も、そうした注意の向け変えの一手段にはかならない。朗読術が直観の類比であるとされるのは、この意味においてである。

さてここで次の点に注意しなければならない。先の引用で、直観とは世界の構成とリズムに共感することであると述べられていた。ベルクソンの直観が一種の共感であることは周知の通りである。しかし、その類比が朗読術であるとされているところから明らかであるように、この「共感」とは受動的態度ではないし、言語を用いない

感情的な一体化のことでもない。「哲学者は服従も命令もしない。共感しようとするのである」(P.M.139)。朗読はわれわれが自らの身体を用いて能動的におこなう営みである。テキストのリズムや抑揚を知るには、自らそれを作り出さなくてはならない。ここには

「われわれはある程度発明し直すことができるものしか認識しないし理解もしない」(P.M.95)」という考え方が基本にある。文の運動、すなわちそのリズムや抑揚は、著者の思考の運動を反映している。読者は文の運動を自ら模倣してみることによって、それを通じて自

らのうちに著者の思考の運動を創造し直す。この作業は、新たな運動習慣を身につけようとしている場合と本質的に同じである。このような再発明、再創造、あるいは運動習慣の獲得は、力動図式によっておこなわれる。次に力動図式がどのような意味で再構成の図式であるのか、この点を見よう。



(2) 力動図式／知的努力

a. 図式の方向性

ベルクソンは、『知的努力』の中で、想起、計算、解釈、発明などの知的作業の際にもなう努力感の本質を問うている。このような場面でおこなわれる努力は、すべて再構成、再創造の努力である。計算を辿るとは計算を自らやり直すことである。ある問題の解決を理解するとは、その問題を自ら解いて解決にいたることに他ならない。同様に「解釈とはじつは再構成である」(ES, 171)。次項で詳しく検討するように、直観を表現するための方策は、このように「自らおこなう」ようわれわれを誘うという形を基本的にとる。

このような再構成を首尾よく遂げるには、作業をどこから始めてどこへと向かうか、その「方向」が重要である。対照的な二項の関係を把握できるのは、ある一方から他方へ向かうときであって、その逆ではない。この点はさまざまな形で繰り返し説明される。概念から事物へと向かうのではなく、事物から概念へと向かわなければならぬ (PM, 198)。身体から出発して外界へと向かうのではなく、イマージュの総体から出発して身体を局限しなければならぬ (MM, 46)。語から意味を構成するのではなく、意味から出発して語と再会しなければならない (ES, 170-2)。

この最後の作業にとって力動図式は中心的な役割を果たす。力動図式が示すのは一つの「方向」だからである。この図式は例えばある名前を思い出そうとしている場合、「とりわけ、探している名前を口に出せるために従うべき、ある努力の方向を指し示すものとし

て思い浮べられる」(ES, 165)。そして文字の形や音の再構成へと導くのは意味／方向 (sens) である。われわれは語から意味を再構成することはできない。個々の語の意味は固定したものでなく、その語が登場する文によって、また文の中でとる位置によって変わるからである。「文の歩みや運動に依じて、文の統合部分を成している語はさまざまな様相を取る。ちょうど、ある旋律主題の各音が主題全体をおぼろげに反映するように」(MM, 130-1)。われわれが最初に覚えるのは、語ではなく文あるいは成句である。後に教師がそこから語を抽象することをわれわれに教える。このようにベルクソンは、個別的な語よりも文、文そのものよりも文の運動を一貫して第一におく。それゆえ先に触れたように、意味(あるいは文)から語へと向かわなければならぬ。一般化して言えば、具体から抽象へではなく、抽象から具体へと進むことが肝要なのである。ベルクソンが知的努力の考察に、「力動図式」という概念を導入したのは、他ならぬこの抽象から具体へという方向性を明示するためであった。われわれが出発すべきは、抽象的なものからである。

b. 図式の抽象性

図式が抽象的なものであることは、『知的努力』の随所で明言されている<sup>3)</sup>。しかし、それは「各々のイマージュを貧しくして得られるイマージュの抜粋 (PM, 161)」としての抽象性ではない。図式がもつ独特の抽象性を理解するためには、『ラヴェッソンの生涯と哲学』に登場する次の比喩が役に立つだろう。色という観念について語るには二つのやり方がある。一つは、個々の色からその固

有な色合いを抜き去り、赤色でも、青色でも、黄色でもないものとして否定によって規定するやり方である。この場合、われわれは抽象的なものうちに止まる（こちらがふつうに言われる場合の「抽象的なもの」である）。もう一つは、青色、紫色、緑色、赤色の何千もの色合いを集光レンズを通過させて同一点に集めるといふやり方である。そのとき、さまざまな色合いが収斂する点に出現する純粋な白色光は、それらの色合いの抽象ではなく、具体的な色合いの多様性をその不可分の統一のうちに閉じ込めている（P.M. 259-300）。これが、直観の比喩として語られていることは明らかであろう。ベルクソンにとって持続の直観とは、既成のどんな多様性にも統一性にも似ていない、独自の多様性と統一性を備えるものであった。図式も同様に、イマジユとは異なるが、しかしイマジユの抜粋ではない形で抽象的で、単一なものである<sup>(9)</sup>。

ところで第一節で述べたように、ベルクソンは直観を芸術活動になぞらえ、芸術の言語に対しては肯定的な評価を与えている。哲学の言語は芸術の言語と同じく実用を旨としない。しかし、同時に芸術の「言語」のように、イマジユにとどまらない。それはあくまで知性の言語なのである<sup>(10)</sup>。つまり抽象と一般化を排除しない。ただし、ここで求められているのは、個別者、イマジユの多様性を犠牲にしないような抽象性、一般性である。すなわち、力動図式がもつ抽象性である。

ベルクソンは確かに直観を近似的に表現する手段としてイマジユを推奨し、その理由としてイマジユの具体性を挙げている。

しかし、直観そのものは具体的であると同時に、言葉のある意味で抽象的なあるいは単純なものである。それは、具体物の抜粋によってではなく、その「収斂」によって得られる。これは彼が言語の抽象性を非難するとき、念頭においていたものとはまったく異なる。彼は言語をその抽象性のゆえに非難したが、だからといって単純に知覚や比喩の言語がもつ具体性を推奨したのではない。ある特定の型の抽象、特定の型の具体者が問題なのである<sup>(11)</sup>。

直観の、あるいは力動図式の抽象性が上のようなものであるとすれば、『哲学的直観』の次の逆説的な一節の真意も明らかであろう。イマジユは概念よりも具体的であり、その点で概念よりも直観に近い。しかし、直観に近づこうと「イマジユよりさらに高く遡ることによってイマジユを越えようとする」と、必ずまた概念に落ち込んでしまう。しかも、イマジユと直観を求めて出発した概念よりもさらに漠然としており、ずっと一般的な概念に<sup>(12)</sup>（P.M. 132）。イマジユを通じて直観にいたるには、「イマジユを越えようとする」のではなく、それらを「収斂」させなければならぬ。それらが指し示す方向に目を凝らさなければならぬ。直観を獲得するには、感性的なものや意識の外に出る必要はないと言われていたのもこれと同じことである（P.M. 141）。直観はイマジユ（知覚対象、比喩）のものではないが、それを「越えたり」その「外に出たり」して得られるものではなく、いわばイマジユの指示にしたがって進む「方向」に見出されるものである。それゆえ、直観を表現する個々の比喩ではなく、それらが共通に指し示すものが重要なのであ

る。そこで次に検討すべきはイマージュの収斂である。

### (3) イマージュの収斂

すでに見たように、ベルクソンはさまざまな事実の線が収斂する先に実在が認められるとしていた。また、さまざまな色合いの光を集光レンズによって一点に集めるとき輝き出る白色光を、直観の比喩として語っていた。同様に彼はイマージュの収斂についても語っている。『形而上学入門』では、原理的には表現しえない持続の直観に導くために、さまざまなイマージュを、そのどれもが特権的位置を占めないように援用するという方策が語られている。「きわめて異なった事物の秩序から取られた多くのさまざまなイマージュは、その作用の収斂によって、把握すべき直観があるまさにその点に意識を向けることができるだろう」(PM, 185)。この場合イマージュは具体的な経験に訴える比喩と解することができる。重要なのはそのどれか一つが、表現しえないもの(持続の直観)の決定的比喩となるのではなく、さまざまな比喩が収斂する先に注意を向けることである<sup>(12)</sup>。イマージュの指し示す方向が重要なことから、イマージュ同士は互いに類似している必要はない。それどころかどれか一つのイマージュが特権的位置を占めることがないよう、「きわめて異なった秩序」からイマージュを採用する必要がある。

イマージュ同士がまったく異なっているにもかかわらず、どうしてそれらは同一点に収斂することができるのだろうか。言い換えれば、先に引用した白色光の比喩で、「集光レンズ」にあたるのは何

なのだろうか。『知的努力』の次の一節がこの疑問に解答を与えてくれる。ここではイマージュ同士は外的には類似していないが、いわば内的に類似していると語られている。

「しかし、知的努力の場合には、継起するイマージュは互いにどんな外的相似を端的にもたなくてもよい。すなわち、それらの類似はまったく内的なのである。それは意味の同一性であり、ある問題を解決する等しい能力である。これらのイマージュはその外的形態が互いに異なるにもかかわらず、この問題に対して類似した、あるいは相補的な位置をそれぞれ占めるのである。」(ES, 188-9)

つまり、イマージュを収斂させるのは解決すべき問題である。文を理解するときには、「想定され、仮説的に再構成された意味」(ES, 172)「が語を引きつける。このような仮説的「意味／方向」がわれわれを導いてくれるだろう。作曲家や詩人の場合には、「新しい印象」であり、作家の場合には「一つの主題」が導きになる(ES, 175)。機械を発明する場合には、果たすべき機能をわれわれは目指す(ES, 174-5)。発明の場合、こうした到達すべき目標、理想がまず具体的イマージュではなく、抽象的図式の形で表象され、そのちにこの目標を実現するための具体的細部が編成される。これらはすべて、「問題」あるいは課題であると言える。この問題がイマージュを収斂させるのである。

以上のイマージュの収斂をめぐる考察によって、冒頭で問うた芸術の言語がおこなう「暗示」について答えることができるだろう。芸術の言語がもつ「暗示」の能力とは、これまで見てきたような、

われわれの注意を一定方向に向け変える作用のことであると考えられる。暗示は対象を直接記述することではない。そもそも直接記述できないようなものを表現する際にとられる手段である。しかし、暗示はわれわれの注意をある方向に導くことができる。芸術家のイマージュ（形象／比喩）も直接語りえないものにわれわれを導く手段である。暗示によって、われわれは何か報告されたものを受け取るのではない。暗示は、われわれ自らが注意を向け変えるよう「誘う」のである。ではこの「誘い」はわれわれの何に訴えかけるのだろうか。

#### (4) イマージュと身体経験

すでに触れたように、ベルクソンがイマージュ／比喩を直観の表現手段として挙げるのは、それが具体性をもつからである。このイマージュの具体性は正確に言ってそれがもつどのような特性にあるのだろうか。それは、われわれの身体経験を中心とした具体的で馴染みの深い経験を喚起する能力にある。われわれの注意を一定方向に向けるための最も基本的な手段はわれわれの身体にある態度を取らせることである。ベルクソンが直観の表現手段として比喩／イマージュを推奨したのも、それが具体的な身体的態度をわれわれ自らが現実取るよう、あるいはその記憶を呼び起こすよう「誘う」ためであると考えられる<sup>(13)</sup>。ベルクソンの著作には、このような身体経験に訴える比喩が、重要な役割を担って登場する。エラン・ヴィタールの喩えとして用いられる、やすり屑の中を進む手の比喩はその一例にすぎない。また比喩ではないが、同じ目的をもつもの

として、現実運動をおこなってみよう勧めたり、知的再構成のいわば原型として運動の再構成を取り上げたりする例を挙げることができる。前者は、運動の不可分性を体験させるために、実際に自分で腕を上げてみるよう促す場合である。後者は、ダンスの習得を新たな概念の獲得という知的作業の原型として持ち出す場合である。ワルツを習得する際の身体経験に言及するこの例では、すでに身につけている古い運動習慣を「ワルツの一般的運動の方向に、曲げて、(ES, 180)」(傍点は引用者) 新たな習慣を獲得する営みが描写されていた。

このように身体的経験が直観への入口としてたびたび言及されるのは、われわれの身体経験がもつとも基本的で、自然であるからだろう<sup>(14)</sup>。言い換えれば、朗読術の項で触れたように、身体経験はわれわれにとつてもつとも馴染み深いものであるからだ。そしてエールシュが指摘する通り、直観の創造する新しい概念を対象化するには、まずそれをわれわれが一度やったことがあるもの、馴染みの経験に結びつけるのが有効な手段である<sup>(15)</sup>。われわれが適切な身体的態度を取ることができれば、われわれの注意は自然に一定の方向へと向かう。ベルクソンが直観の出発点に見ていたのは、このような特殊な注意の様式であった。ベルクソンの直観の母体となった「良識 bon sens」に関する講演で、彼は次のように述べている<sup>(16)</sup>。「記号を退けて見ることに慣れるだけでは十分ではありません。そのうえに、すでに述べたように、あまりにも抽象的なやり方で判断する習慣から抜け出し、まったく特殊な注意様式を開発しなければなら

ません」(M, 368)。直観的認識は、実用性の方向を向いたわれわれの注意の転換から始まる。

以上の方策は、われわれが第一節で見た、日常語を利用してその意味の転換を計るという手段に呼応している。日常語が表現するわれわれに馴染みの経験は、原理的には言表を拒んでいる直観への入口を開いてくれる。新たな語彙の導入は、われわれの具体的経験との連関を断ち切ってしまうという点でも得策ではないのである。ただし、そこでも述べたように、日常語の意味(sens)を摸めて一定方向(sens)へ向け変えなければならぬ。そのような方向が収斂する先に実在の直観が見出されることは、もはや繰り返すまでもないだろう。

## 結論

ベルクソンが本来表現しえない直観をわれわれにもたらそうとした手段は、つねに具体的なものを通じてであった。それはある場合には日常語に新たな意味を負わせることであり、別の場合には現実を異なった仕方で裁断する言語間の翻訳という手段であった。あるいは実際に声に出して読むという行為を通じて、著者の思考の運動とリズムをわれわれ自らが再構成することであった。また、われわれの身体的経験を喚起するイマージュ／比喻を利用して、直観が見出される「方向」にわれわれを「誘う」ことであった。本論で検討したようなさまざまな方策によってわれわれは、直観の内容を受け

取るのではなく、そのような方策に促されてわれわれ自らが直観的認識へと赴くのである。

これらはいずれも何らかの形で、言語にかかわる営みである。ベルクソンは、他ならぬ言語がもつ記述以外の働きをも利用して、表現しえない直観に、あるいは実在の認識にわれわれを導こうとしたのである(17)。

ベルクソンの著作の引用略号は以下のとおり。

- (DI) Essai sur les données immédiates de la conscience (1889)
- (MM) Matière et mémoire (1896)
- (ES) L'Énergie spirituelle (1919)
- (MR) Les Deux sources de la morale et de la religion (1932)
- (PM) La Pensée et le mouvant (1934)
- (M) Mélanges

注

(1) この点については以下の拙稿で詳しく検討した。「ベルクソンの直観と概念の再編成」(『大阪大学人間科学部紀要』第十六巻、一九九〇年、掲載予定)。

(2) Lettre a Harald Höfding (1915, Mars 15: M. 1146-50)

(3) MM. Ch. I. またこの例は、流動概念との関連で以下の拙稿でも取り上げた。

「直観はいかにして表現されるか—ベルクソンの直観の表現へといたる歩み」(『年報人間科学』、大阪大学人間科学部(社会学・人類学・人間学研究室)、第十号(1989年)、pp.15-31。

(4) デイヴィッドソン(On the Very Idea of a Conceptual Scheme, in *Inquiries into Truth and Interpretation*, O.U.P. 1984)はウォーフの言語相対主義を批判する文脈の中で、次のように述べている。「一方、ベルクソンは、どこかの地方から見ると歪められるということのない山の光景が、どこへ行けば得られるかを語っている。」(18) もちろん、デイヴィッドソンは直観という場所を示唆している。しかし本文から明らかのように、ベルクソンは言語が現実を異なった仕方で切り分けることを相対主義の論拠とし、それらを超越した視点として直観を持ち出しているのではない。むしろ異なった言語を通じて實在の直観へいたる方策を探ろうとしているのである。さらにデイヴィッドソンは、先ほどの引用箇所を少し先で次のように語るとき、ベルクソンの名こそ挙げていないもの、おそらく彼を含む哲学者を念頭に置いていると思われる。「そうでなければ、いかなる言語も實在を歪めるといふ考えがある。この考えによると、心が、事物をそれがほんとうにあるとおりに掴むにいたるには言語によらずに(そんなことができる)話だが) そうするしかない」(185)。

もしこのような考え方にベルクソンの直観も含まれているとすれば、われわれはこれも誤りであると考える。詳しくは注(1)で挙げた拙稿を参照。

(5) 『創造的進化』における上向運動と下向運動の対比、『知的努力』

における力動図式の平面上の水平運動と平面間の垂直運動の対照などは、その一例にすぎない。

(6) ちなみにメルロ・ポンティも、身振りの言語を語る文脈で、われわれの期待を正確に満たしにやってみて、予見することはできないが必然性を感じさせ、われわれを言ひなりにしてしまふ演説の体験について語っている。Phénoménologie de la perception, Gallimard, 945, pp.209-10。

(7) ここで述べられている抽象は、すぐに見るように「抜粋」としての抽象でない。また「意味」も、特定のイメージの系列を再構成するような意味であるのだから、まったく異なったイメージの系列に属することができるよう「論理的意味」ではなく、イメージそのものから完全に切り離しえなうような意味である(ES, 161)。

(8) われわれは「観念、すなわち抽象的關係から出発」(71)する。「多少とも抽象的な表象の次元に一挙に身をおく」(ibid.)。「知覚対象によって示唆された抽象的な關係」(77)。「この作業の抽象的形式」(75)。「最初は精神のうちには、単純な、抽象的なものがある。

私はそれを形のないものincorporelと呼びたい」(ibid.)。「実のところ、この表象の有用な部分は、純粹に視覚的でも純粹に運動的でもない。同時にその両方である」(76)。「抽象から具体へ、図式からイメージへ」(76)。ページ番号はいずれもESのものである。

(9) 『道徳と宗教の二源泉』に登場する創造を要求する情念も、表象を欠くという同じ性格をもっている(MR, 44)。

(10) 注(2)であげたヘフディングへの手紙の中で、哲学的直観は、イメージの源泉である生命的なものにまでいたること、知性をも援用することが、芸術的直観と異なる点であると述べられている(M, 1148)。

(11) 一般性についても事情は同じである。ベルクソンは一般観念をひとしなみに退けたのではない。彼は社会の利害に奉仕する一般観念のみを退け、今日自然種と呼ばれるものを表わす一般観念の基礎は實在そのもののうちにあるとみなした(PM, 53-64)。

- (12) デイヴィッドソンも「隠喩は何を意味するか」で、隠喩とはそうではな  
ければみすごしてしまうものにわれわれの注意を引きつける働きであ  
る」と述べている。Davidson, op. cit., p. 257.
- (13) D. スペルベルは、完全に確立された命題内容をもたない「半命題  
表象」という概念を提唱し、半命題表象は可能な解釈の領野を開き、  
読者をそこへ「誘う」ものであるとしている（『人類学とは何か』、  
菅野盾樹訳、紀伊國屋書店、1984年、p. 114-5）。ヘルクソン  
が直観の生み出す観念は最初は漠然としていると述べていた（P.M.  
31-2）ことを考え合わせると、直観の生み出す観念とは、われわれ  
を探究へと誘う半命題表象ではないだろうか。
- (14) レイコフとジョンソンは、隠喩的定義とは経験の中で明確な輪郭を  
取りにくいものを、身体的経験を始めとする明確な輪郭をもつ自然的  
で基本的な経験に結びつけるものである、としている。『レトリック  
と人生』（渡部昇一他訳、大修館書店、1986年、p. 176）
- (15) Jeanne Hersch, 'Les images dans l'oeuvre de Bergson',  
*Archiv de Psychologie*, Tome, XXIII, n° 90, (Aout 1931) p.  
120.
- (16) 良識と直観との関係については次を参照。Rose-Marie Mosse-  
Bastide, *Bergson éducateur*, P. U. F., 1955, Ch. VII.
- (17) 本稿、および注の(1)と(2)に挙げた論文は、直観の表現とい  
う問題関心をめぐる一連の論稿である。合せてお読みいただければ幸  
いである。なお、注(3)の拙稿の結論で提起した共感としての直観  
に向けられた課題には、本稿の第三節で答えたつもりである。